

『反骨のコツ』

團藤重光, 伊東乾 編 朝日新書 777円(税込)

「常に常識を疑え」,
対談を通じて深める「團藤重光」

会員 齊藤 圭太(61期)



「團藤重光」。戦後日本の刑事法学の第一人者であり、元最高裁判所判事であり、戦後日本の法曹の礎を築いたうちの一人である。それにとどまらず、幼少のころから陽明学に傾倒し、天下国家を考え高校大学時代を過ごし、戦後の新刑事訴訟法の起草でGHQとの交渉の矢面に立ち、東宮職参与という経歴をもっている。

本書は、深遠な「團藤重光」を、作曲家・指揮者であり、東京大学大学院情報学環准教授である伊東乾氏が対談を通じて深めていくものである。

「なまじ法律をかじっていると、なんでも『ああ、あの話ね』と分かったような気になって、表面を撫でるだけで終わってしまう危険性があるでしょう」という團藤先生の言葉のとおり、音楽界というバックグラウンドを持つ伊東氏の豊富な教養と知識が、対談の深みを増している。その対談の内容は、刑事法学、裁判員制度、死刑制度の廃止といった法律分野に関するものか

ら、團藤先生の幼少期のエピソード、学生の三島由紀夫に刑事訴訟法を講義したときのエピソード、GHQとの交渉、東宮職参与の職に就かれていたときの話などにも及び、團藤先生の深みを十二分に感じることができる。

本書のテーマでもある「反骨」とは、「常に常識を疑え」という反骨精神であり、團藤先生が傾倒していた「陽明学」に通じる部分が多い。「陽明学」は、現実を直視する批判的・合理的理性の学でもあることから、権力に反抗する学問とも評され、幕末、明治維新に活躍した吉田松陰らも影響を受けており、また團藤先生の主体性理論や死刑廃止論にもつながっている。

「本書」を通じて、「反骨」とは、何事に対しても気概と信念を持ち続けていると壁にぶつかるが、その壁を乗り越えるために最大限を尽くし、自分が信じる正義を実現することであると感じた。

「反骨」の際には、「反骨のコツ」を手元におきたい。